

# 古代史散策

No. 032

いわれ  
磐余南部 ①

パナソニック電気松寿会  
古代史散策部

昭和59年 6月作成  
平成16年11月三刻  
平成30年 3月パソコン版

## 《 コース 》

7 km

近鉄桜井駅 一 若桜神社 一 注) 艸墓古墳<sup>くさほか</sup> 一 土舞台 一  
石寸山口神社 一 安倍文殊院(東古墳・西古墳) 一 安倍寺跡 一  
谷首古墳 一 メスリ山古墳 一 聖林寺 一 近鉄桜井駅

注) 艸墓古墳<sup>くさほか</sup>は土砂崩れで立ち入り禁止の為、割愛します。

## 《 総 説 》

古来<sup>いわれ</sup> 磐余と呼びならされた地域は、大和盆地のほぼ中心に位置する。現桜井市の中西部から橿原市の東南部に当たり、既に干上がり消滅してしまった磐余池(埴安池)<sup>はにやす</sup>を中心とした周辺一帯の地であって、宇陀山塊・吉野山塊に入る咽喉もとに位置する。ここは、縄文・弥生期の遺跡も残存し、太古より人類が住みついていたし、朝鮮渡来の民も多く入植していた。また神武東征伝の最後の道筋として磐余の名を見出すのである。即ち

神武天皇即位前紀<sup>つちのえうま</sup> 戊午9月の条：

「天皇(神武)かの宇陀の高倉山の嶺に登りて域中を膽望りたまう。……復<sup>また</sup> 兄磯城<sup>えしき</sup>の軍ありて、磐余<sup>むら</sup>の邑に布き満てり。賊虜<sup>あたま</sup>の抛る所は是皆要害<sup>ぬみ</sup>の地なり。故、道路絶え塞がりて通らんに処なし。天皇悪み給う……云々」 この磐余で、強敵と遭遇された神武天皇は、武勇の誉れ高い大伴氏の遠祖<sup>あめ</sup> 天忍日命<sup>あめのしひ</sup>の奮戦、椎根津彦<sup>しねつひこ</sup>(珍彦)や八咫鳥等の協力により敵

軍を撃破して、いよいよ宿敵 生駒山の長髓彦との決戦を挑まれたのであった。

神武天皇の和風諡号を「神倭伊波礼毘古命」(紀は神日本磐余彦天皇)とする訳は、どんな理由からかはよく判らぬが、長髓彦討伐の地「白櫃原の地に即位す」との伝承から考えると、この磐余を中心として村落国家の首長とられた名残りなのではあるまいか。従ってこの地は、わが国建国の聖地として尊ばれたのであろう。後年 皇居が多く営まれわが国古代の中心だったと思われる。

- |        |           |    |          |
|--------|-----------|----|----------|
| 第 14 代 | 仲哀皇后 (神功) | …… | 磐余若桜宮    |
| 第 17 代 | 履中天皇      | …… | 〃 稚桜宮    |
| 第 22 代 | 清寧天皇      | …… | 〃 甕栗宮    |
| 第 26 代 | 継体天皇      | …… | 〃 玉穗宮    |
| 第 30 代 | 敏達天皇      | …… | 〃 詔語田幸玉宮 |
| 第 31 代 | 用明天皇      | …… | 〃 池辺雙槻宮  |

“磐余”の地名の由来は諸説があつて定かではないが、磐余は石寸とも表記されており、「寸」は村の省画文字だから、古朝鮮語の「村」の「アレ」乃至「ムレ」を採り、「イワアレ」→「イワレ」としたのであろう。即ち「岩多き村」の意とする説はもっとも説得力がある。

磐余を本願の地とした阿倍氏が記紀に出る初見は、<sup>28</sup>宣化天皇の時からである。

即ち宣化元年2月紀1日の条：

「大伴金村大連を以て大連とし、物部鹿火大連を以て大連とすること並びに故の如し、また 蘇我稻目臣を以て大臣

とし、阿部大麻呂臣を以て大夫とす……」<sup>まへつまみ</sup>とあり、おそらく阿倍氏は、蘇我氏の庇護を受けて政治の第一線に躍進の機会を把んだ。日本書紀は、宣化時代としているが、宣化帝と欽明帝とは二帝並立していた節があり、欽明幼帝を担ぎ出した蘇我氏が、継体—安閑—宣化を滅ぼして政治の実権を握ったに相違なく、おそらく蘇我—欽明側に加担したその庇護のもとで、次第に政治的地歩を固めていったのではなかったか。磐余に散在する古墳には、500 末～600 年の終末期古墳が特に多く、その頃になってから愈々強大となった阿倍氏の首長達の墳墓であろうと云われている。

現在では桜井市やその近郊に磐余の地名は、東光寺山の北の一カ所だけが町名として存続しているのみで、殆ど残っていない。由緒深い磐余は、これもすっかり干上がった磐余の池と共に消滅してしまった。

## 《 各 説 》

### 【式内 若桜神社】

桜井市谷

若桜神社は、市内の池ノ内と橋本に“稚桜神社”と字は違うが同名の社が祀られていて紛らわしく、いずれが式内社か不明である。



この社は、阿倍一族がその祖神の伊波我加利命を祭祀した神社である。現在は、本殿左側に安倍文殊院の東方の松本山に鎮座していた“式内高屋安倍神社”が合祀

されている。境内に接して、名井“桜井”が残存していてここ桜井の地名の起こりと云われている。  
この地は履中天皇の磐余稚桜宮跡であると云われている。

### 【<sup>くさしか</sup>艸墓古墳】

桜井市谷

別名「カラト古墳」とも呼ばれ、古墳終末期の代表的なもので、長辺 28m、短辺 22mの長方形墳で、羨道（長さ約 8 m 幅 1.9m高さ 1.5m）を伴った、巨大な花崗岩の切石を積んだ奥行約 4.5m、幅 2.7m、高さ 2 mの玄室（石室）が東面して造成され、見事な刳抜き家形石棺（長さ 2.4m幅 1.5m蓋を合わせた高さ 1.75 m）が置かれている。石室、石棺の構造から、600 年代前半～中葉の築造かと云われているが、羨道より石棺の高さの方が高く、どうして収納したのか疑問である。

### 【土舞台】

桜井市阿部

磐余の丘が急に落ち込み、文殊院の丘に向かい合う南端の台上の平らに開削された児童公園の隅に“土舞台”と彫られた石碑が立つ。



<sup>みまし</sup>推古天皇 20 年紀に「百済人味摩之帰化す。曰く“呉に学<sup>くれがく</sup>びて伎楽の舞を得たり”と、即ち桜井にはべらしめて、少年を<sup>つど</sup>集へて伎楽の舞を学ばしむ。ここに<sup>まのおびと</sup>真野首弟子、<sup>しまきのあやさいもん</sup>新漢濟文、二人習いてその舞を伝う……云々」

土舞台は、聖徳太子が伎楽を子供に伝習させた、わが国演劇発祥の地と伝えている。

ただ、桜井は、飛鳥の甘樞丘東北麓の推古天皇豊浦宮跡に建てられた、豊浦寺を別名桜井寺とも云うところから“桜井は飛鳥か”との説もある。

かつて丘の下に溝跡が残り、<sup>37</sup> 齊明女帝 2 年 9 月紀に載る“穿った渠”ではなかろうか。

齊明天皇 2 年(656) 9 月紀：

「<sup>たむのみね</sup>田身嶺（<sup>こうぶ</sup>多武峰）に冠らしむるに<sup>めぐ</sup>周れる垣を以てす。復嶺の上の<sup>ふた</sup>両つの<sup>つき</sup>槻の<sup>ほとり</sup>樹の<sup>たかどの</sup>辺に<sup>た</sup>観を起つ。名づけて<sup>ふたつき</sup>両槻宮とす。……即ち水工をして<sup>みぞほら</sup>渠穿らしむ<sup>かぐやま</sup>香山の西より<sup>いそのかみやま</sup>石上山に至る<sup>いそのかみやま</sup>舟二百雙を以て石上山の石を載みて流れのままに引き<sup>たぶれこころ</sup>宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人<sup>みぞ</sup>誇りて曰く「<sup>みぞ</sup>狂心の渠……」云々。」

### 【<sup>いわれ</sup>式内大社 石寸山口神社】

桜井市谷

磐余山の南西麓まさに山に登る入口に祀られる、普通“いわれ”に“石寸”の字を当てる。石寸は石材の省画文字で、その語源を解く一つの鍵ではなかろうか。



“いわれ”の地名語源については、

江戸初期の契仲阿闍梨の「屯聚」説を始め、諸説あって定め難いが、「村」の古朝鮮語を「アレ」「ムレ」と訓じ「イワ」は「岩多い地」とする説が

殆どだから、安倍氏の祖の伊波我加利命の「伊波」と考えられぬこともない。

この社名は、この他、桜井市高田にもあっていずれが式内社か判らない。この付近から前述の若桜神社にかけての丘陵に、神功皇后、<sup>17</sup> 履中天皇の若桜宮があったと云い伝えている。

社殿は南面し、社前に<sup>こも</sup>菰池が広がる。近年、木材業界の守護神として崇敬が厚い。

### 【安倍文殊院】

桜井市阿部

文殊院の西南に寺跡がある。安部寺の別院として平安末期の承暦年間(1077~1080)に豊後の人<sup>せんけん</sup>暹賢上人が開いた寺と伝えている。本尊は鎌倉時代前期の仏師 快慶作の、木造極彩色騎獅文殊菩薩像。本朝三文殊の第一。

この地は欽明朝以来、蘇我氏の庇護を受けてにわか台頭した、阿倍氏一門の墳墓の地ではなかったかと思われ、付近には、500年未~600年にかけて築造された終末期古墳多く、境内にも東西2基の見事な終末期を代表する古墳が存続している。

◎東古墳：短い羨道を持つ横穴式石室は、花崗岩の壁面を平らに加工して築造。羨道入口近く<sup>あかい</sup>に何時の頃か井戸が



穿掘され、<sup>あかい</sup>関伽井古墳とも呼ばれる。墳形は破壊甚だしく不明。羨道の長さ5.5m幅1.2m高さ1.5m。石室の奥行4.7m幅2.5m高さ2.6m。600年初頭の構築である。

◎西古墳：東古墳と並び、南面に開口部を持つ横穴式石室のある円墳。石室は花崗岩を立方形に切断して整然と積み上げ、表の壁面は水研ぎされて築造時には顔や姿が鏡のように映っていたことであろう。石の継目に漆喰をつめた痕跡がある。



大化改新の時の左大臣 阿倍内(倉梯)麻呂の墓か、と云うが確証はない。

### 【安倍寺跡】

桜井市阿部



寺伝では、大化の改新(645)の後、時の左大臣阿倍倉梯麻呂が創建と伝える古刹で、法隆寺式伽藍配置であった。寺院跡周辺には金蔵院、宝光院、中院、客坊、仁王堂等の小字があり、時折飛鳥時代から鎌倉期に至る各時代の古瓦が見出されているから、創建期は大化よりさらに溯

るのかもしれない。

### 【谷首古墳】

桜井市阿部



艸墓などと同型式の石室を持つ終末期の方墳で、600年代初めの築造。南北の子午線に正確に一致させて造成され、石室の開口部は南面する。方墳は、東西約35m、南北約

38m、高さ8m。羨道の長さ7.8m、幅1.7m、高さ1.74m。玄室の奥行6m、幅2.8m、高さ4m。河原石が敷きつめてある。奥壁は巨石を2段に、側壁は3段積み。古墳の後方丘上の八幡社は、式内高屋安倍神社の旧地かと云われている。

### 【メスリ山古墳】

桜井市高田

我が国最大の円筒埴輪(径0.9m、高さ2.4m)の出土で知られるメスリ山古墳は、大字高田にある巨大な前方後円墳で、前方部を西に向け周濠を持たない古墳です。全長は224mで前方部幅80m、高さ8m、後円部径128mで、高さは19mとされていましたが近年の範囲確認調査で墳丘の裾がかなり埋没していることが確認され、全長は250mに及ぶと考えられ、築造当時は箸墓古墳、西殿塚古墳に次ぐ当時としては最大級の古墳という事が判明しました。墳丘は3段築成で墳丘斜面には葺石が敷かれ、テラス面には埴輪列が設けられていました。この古墳は箸墓古墳、西殿塚古墳、外山茶臼山古墳に続く初期大和政権の大王墓で、築造年代は出土品等から4世紀初頭と考えられています。



### 【聖林寺】

桜井市下

山号は靈園山。藤原鎌足の長子定慧じょうゑが創建と伝える。



平安時代には、南都興福寺の僧兵と抗争し、永保元年(1071)・承安3年(1173)の2度の兵火で総べての伽藍は灰塵に帰した。鎌倉時代に入って、三輪山神宮寺の大三轮平等寺の遍照院を移し遍照

院と称した。江戸中期の享保20年(1735)本堂再建、地藏菩薩を安置して聖林寺と改称今日に至っている。

有名な国宝十一面観音像は、慶應4年5月(明治元年はこの年の9月8日に改元1868年)大御輪寺よりひそかに移された。維新の神仏判然令は翌年6月に発令されたのに関連があるのかもしれない。観音像は、明治20年(1887)米人フェノロサにより真価を見出された。

### 《阿倍内(倉梯)麻呂》

生年不詳～649。従来内麻呂は名前と思われていたが推古朝の大夫に阿倍内臣鳥の名が見え、内は家名であることは明らかである。大化元年6月改新政府成立と共に、首班たる左大臣の地位に就いた。

大化のクーデターに処断された蘇我宗家に引き立てられて、中央政治に係わっていた阿倍氏としては異常な処遇であるが、改新に当たっての功績も伝わってはならず、論功行賞とも云えず不可解である。左大臣としての政治上の事績も殆ど判らない。僅かに大化4年(648)2月に四天王寺で盛大な法要を営んだこと。最初の国営寺の百濟大寺(後の大官大寺→大安寺)建立の造寺司となり、崇敬寺(安倍寺)を建立(東大寺要録)したことが知られるのみである。大化5年(649)3月17日難波京で薨。娘の小足姫は即位前の<sup>36</sup>孝徳天皇(軽皇子)の妃となり、有馬皇子を産んだ(640)。また橘姫は<sup>37</sup>天智天皇の妃となった。

作成 西村 誠  
三刻 末岐 敏一  
パソコン版改訂 堀内 肇

